

# 樹木希林<sup>73</sup>

## 老いと死の 名言集!



今ほど皆が、老いや、がんなどの病い、そして死を恐れている時代はない。それに逆行するような樹木の言葉は、私たちに人生の真の豊かさを教えてくれる。

「もう親もいませんし、娘も自立していただきますので、72歳になって、納得して、死ぬ覚悟のある人間、だなどと思ってい

ます。やり残したことなく、死んでみないとわからないですよ」(15年6月「いきいき」)

死という重いテーマを語りながら、どこまでも自然体の女優の樹木希林(73)。

’03年の網膜剝離に続き、’05

年の乳がんによる右乳房全摘出の会見、さらに13年の「私は全身がん」という告白も衝撃的だった。

それでも「がんになってよかった」と語る独自の死生観をあらためて見せつけたのが、1月5日の新聞に見開き全30

段・オールカラーで紹介された宝島社の企業広告。英国の画家ミレイの「オフイリア」をモチーフに、シェイクスピア

の悲劇「ハムレット」で小川を死を迎える美女に扮した樹木。

「死ぬときぐらい好きにさせてよ」

というコピーに、年明け早々、度肝を抜かれた人も多かったようだ。添えられた独

白風の文章も彼女らしい。

「がんがなかったら、私自身がつまらなく生きて、つまらなく死んでいったでしょう」

もともと、がんを患う以前から、樹木の唯一無二ともい

える個性は際立っており、老いや死にまつわる名言は多い。

「人は必ず死ぬというのに。長生きを叶える技術ばかりが進歩して、なんとまあ死ににくい時代になったことでしょう」

’98年から毎年、話題作を発表してきた宝島社だが、同社広報課も今年のインパクトは過去の作品をはるかにしのぐと認める。

「新聞が出た直後より反響が届きました。「人には死に方を選ぶ自由がある」がテーマになったとき、がん公表以来、死と正面から向き合っている樹木希林さん以外の人選は考えられませんでした」

特にシニア世代からの反響が大きかったという。

「私も終活をしているので、樹木さんの言葉が胸に響きました」(70代女性)

「尊厳死まで考えるきっかけとなった」(50代女性)

「若いころからきれいな人は塗っていくんですけど、私は取っついていこう、取っついていこうとしたんですね。くっついていっている飾りを全部、取っついていこうって。そして、日常生活も削っていくと、なんにもいらなくなっちゃうんです。これがね、とっても調子いいんですよ」(99年4月「久米宏対話集 最後の晩餐」)



若いころは「悠木千帆」の名義で個性派女優として活躍

対談)

’14年1月には治療終了を宣言したが、がんとの関わりは続いた。

「がんというときに悲劇と思うか喜びと思うか(喜びというのは変だけど)、意味があると思うのかで、人生、生き

# 「しみじみ死ねる」と思うと

# ちよつと嬉しくなったりね。



「死ぬときぐらい好きにさせてよ」

「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」  
「死ぬときぐらい好きにさせてよ」

方が全然違ってきてきます。年を取って、こんなこともできなくなつたと嘆くか、うわあ、こんなこともできなくなつちゃうのかあと面白いのか」

（14年5月「毎日が発見」）  
日々の暮らしぶりも、そんな樹木流の哲学に裏打ちされていた。  
「古くなった靴下やシャツも

撮影道具として利用して、とにかく最後まで使い切ります。ものたちが「十分に役目を果たして終わった」と思えるように、始末する感覚で暮らしているのです。人間もそれと同じ。十分生きて自分を使い切ったと思えることが、人間冥利に尽きるってことなんじゃないでしょうか」（15年4月「文藝春秋」）

「撮影現場でも、たとえばティッシュペーパーを1回使うと普通はポイ捨てですが、希林さんは端っこが残っているとポケットに入れておいて、何かのときに使うという光景が何度もありました。自分の人生も使い切るイメージで、ふだんから実践なさっているのかなと思いました。  
しかも大上段にかまえるのではなく、「私は死ぬ死ぬ詐欺よ」なんて言いながら、さりげなく徹底しているのがカッコイイと思いました」

もつたいないじゃない？ せっつかく大変な思いをするのに、それを「こんなふうになつてしまつて」と愚痴にしていたら、自分にとつて損です。から、「あ、そうきたか」と捉えています」（15年6月9日「婦人公論」）  
順天堂大学医学部教授で、「がん哲学外来」創始者で理事長の槌野興夫さんは、3千人以上のがん患者・家族と接した体験から語る。  
「人生に期待するから、失望するのです。そうではなく、病いを得てなお、「人間は、人生から期待されている存在である」と思うべき。樹木さんのように、病気を受け入れながら自分のペースでの生活を続けることは大事。「病気があつても、病人ではない」という心構えですね。人間には、最期の瞬間まで、死ぬという大切な仕事が残っているものですから」  
もちろん、人生の締めくくり方も、またブレがない。  
「自分の最後だけは、きちんとシンプルに始末すること、それが最終目標かしら」（14年5月「文藝春秋」）  
死に方とは、生き方そのもの。年の始まりの今こそ、いつか必ず訪れる死について考えるべきときだということを、これら樹木の名言は教えてくれる。

「アンチエイジングもどうかと思います。100歳まで長生きしたい風潮もどうかしら」  
やがて樹木は、死を嬉しうとさえ思う境地に至る。  
「今私は、予定を立てて死ぬるなどという感じがします。「あらっ」と言つて死ぬのではなく、しみじみ「死ぬんだな」という感じの死に方。そういう終わり方ができるなど。それを思うとちよつと嬉しくなつたりね」（前出、鎌田實氏との対談）

「アンチエイジング」というのもどうかと思います。年齢に沿つて生きていく、その生き方を、自分で見つけていくしかないでしょう。100歳まで長

老いに関しては、過激ともいえるこんな発言も残している。  
「アンチエイジング」というのもどうかと思います。年齢に沿つて生きていく、その生き方を、自分で見つけていくしかないでしょう。100歳まで長